

1 問題の所在；『発光妖精とモスラ』と『審判』

堀田善衛(1918-98)の原水爆観；発表者は、昨年9月13日の本会9月例会での口頭発表「中村真一郎・福永武彦・堀田善衛『発光妖精とモスラ』における堀田善衛パート」において、同映画原作(1961年1月『別冊週刊朝日』掲載)が全体として原水爆文学という側面を有するものの、堀田パートでは文脈からそれが顕在的でない、という趣旨の位置づけを行った；⇒その後、同タイトルの拙稿を『群峰』9に寄稿した。

堀田が上記の映画原作とほぼ同時期に執筆していた『審判』(岩波書店、1963.10；1960年1月から63年3月まで『世界』に連載)でも、主人公が広島への原爆投下に関わった米国のパイロットであるという意味で、原水爆周辺がテーマの一つであった。

本発表では昨年9月例会の補足という意味合いも込めて、『発光妖精とモスラ』と同時期の『審判』における主人公以外の一登場人物のモデル考から、堀田の原水爆観の一端を探りたい。

因みに、この『審判』の主人公・ポール・リポートのモデルは、広島への原爆投下に際して天候観測機のパイロットであったクロード・イーザリー(Claude Eatherly)であることが定説化しており、一種のモデル小説とも考えられる。

さらに、堀田は主人公ポールを『白痴』のムイシュキン^{いで}、出音也(リポートが来日した後、一時的に寄寓した家の家長)の義弟・恭助をラゴージン、音也の長女・雪見子をナスターシャ、三女・唐見子をアグラーヤに見立てて本作を創作した、と見る先行研究もある；(⇒水溜真由美『堀田善衛 乱世を生きる』ナカニシヤ出版、2019、p.396；←県立神奈川近代文学館所蔵の堀田の創作ノートによる由)

本発表は、こうした先行研究でほぼ触れられてこなかった出音也という登場人物の描かれ方を通じて、彼のモデルを特定し、同作の原水爆観にこれまでとは異なる光を当てたい。

2 堀田善衛『審判』における出音也の主な描かれ方

『審判』は4部からなる。以下各部毎に出音也の描かれ方を見てゆくが(主なもののみ)、それぞれの言及箇所について丸括弧で付記する頁数は、新版の『堀田善衛全集』第5巻(筑摩書房、1993)のものである(初出の『世界』誌との対照は未)。なお、各部のサブ項目の数字表記は、出典通りに漢数字を用いる。

(1) 第一部

第一部は主人公ポール・リポートが横浜港に到着するまでで、その中で出音也本人とその家族についても語られる。出教授は、二「グリーンランドで」、三「銅像と女優と外務大臣」、四「收拾不能」、一〇「横浜へ」、一一「邂逅・奇妙なアメリカ人」、などに登場。

二はグリーンランドでのポール・リポートとの出会い、三では、教授が59歳であり、ジャーナリズムで活躍しており、随筆集や旅行記も売れており、講演もうまくいった、寒冷地研究者として冷戦体制で重宝されていた。「心配になるようなことは(中略)子供たちにあった」(p.23)として、次男吉備彦、長男信夫、長女雪見子に関する“心配”が語られる。パーティーでの雪見子との会話の回想なども。

四では、教授が吉備彦の生まれた頃を回想する中で、対ソ作戦用にシベリアを目指した寒冷地研究をやり、戦後に冷戦が始まると、「アメリカの軍部を利用して研究を世界的なスケールにもり上げて来た。反ソ、対ソということでは、教授は戦前戦中戦後、まことに見事に一貫して来た」(p.33)、とされる。妻の

弓子から三女の唐見子と義弟の恭助について相談を持ちかけられる(pp. 35f.)。教授の母・郁子刀自も登場。教授は、「シベリア出兵から太平洋戦争にいたる日本の戦争を、首尾一貫した反ソ反共戦争として肯定し認めたい、アメリカとの戦争は、ちょっとした事故だったというほどのことにしたい」(p. 47)という心境になる。

一〇は、吉備彦を乗せてポール・リポートが到着する横浜港へ向かう間の会話や、彼を迎えることにした心情など。一一は、別の待ち人(エディス・モートン)の為に唐見子と雇い主で玩具輸入バイヤーのモートン氏も港に迎えに来ていて、出教授らとリポート、エディス夫人らとの応答がある。リポートが新聞記者に取材されそうになり、急に逃げ出したことなど(pp. 120f.)。

(2) 第二部

第二部は、横浜港の後、とくに後半では、ポール・リポートやモートン夫人らを招いての出教授邸での夕食会が中心となる。出教授は、一「まったく手ぶらで」、四「日ソ漁業から日米パン屋へ」、八「俱会一処」、一〇「続々俱会一処」、一一「それは本当か」、一五「人との交通について」、などに登場。

一では港の場面の続き。教授が、グリーンランドで接した飛行士の印象が自分の誤算であったのかもしれないと気づく、など。四は、吉備彦が所用で冷凍会社を訪ねた際に、一種の地の文で、「戦時中教授の研究室は、飛行機に対する着氷阻止の研究に従事し、また対ソ作戦の鍵をなす極基地の研究をした。そうしていまは、アメリカと協力して北極洋を回遊する氷島のT3で、たとえば氷の弾性についての研究その他を行っている」云々(p. 168)、とある。

八以降が、出教授宅にポール・リポート、モートン夫人、雪見子のエージェントであるステラ嬢を招いての夕食会。教授は来客3人を書斎に招き入れ、グリーンランドのスライドを上映する(p. 185)。モートン夫人が部屋にあった般若面を見つけ、出教授が安達ヶ原の粗筋を説明する(p. 187)。この会合の途中、女官長の高沢が教授の来春の御進講が決まったことを告げに来る(pp. 192ff.)。さらに、吉備彦の同級生・河北華子の夫でデモに参加して負傷した柳村修三、恭助の軍隊自体の上官だった志村らがあいついで出教授宅を訪ねて来る、などスラップスティック的な描写。九はその続き。

一〇は、父のような「オールド・リベラリスト」に対する唐見子の嫌悪など(p. 219)と、応接室でのスライド上映の続き。一一は、スライドに続き、カラー映画の上映が始まる。途中、リポートがイター(北涯の島)で越冬したと告げ、皆がそれに聴き入る(p. 231)。

一五は、ポール(一三から地の文でポール呼び)が恭助に、出教授に、「あのこと」について、気にするな、永久に忘れてしまえ、と言われたことなどを告げる(pp. 273f.)。

(3) 第三部

第三部は、ポールが出教授邸に寄寓することになって以降である。出教授の出番は少なく、六「まったく、さびしくない」、一一「なぜ唐見子はポールを殴ったか」、などのみ。

六は出弓子の結婚当時の回想で、夫と「赤い」友人たちとの交際に心配していたが、助教授になった頃に参謀本部の寒冷地作戦の為の研究に忙殺されるようになり、敗戦後は主任教授が占領軍によって追放され夫は教授になった、云々(p. 356)。一一は、教授がポールを箱根の二泊旅行に連れ出した話。

(4) 第四部

第四部は、主にポールおよび関連する何人かの広島行きが語られる。出教授は、二「プールを造る」、四「“人生の歓楽”」、などに出て来るが、いずれもストーリーの本流から外れたエピソード。

二は、河北画伯が娘・華子の夫修三が入院する際、出教授の紹介であったことを思い出し、教授に御礼

に来る。その際教授は、画伯の名刺に「芸術院会員」とあったせいか、低温研究室を愛想よく案内した(p. 452f.)。四は、吉備彦が広島行きの軍資金を父にせがんだ時、教授も広島に行った方が良いと言ったが、実現しなかった(pp. 469ff.)。

(5) 小括

水溜真由美『堀田善衛 乱世を生きる』(前出)や高橋誠一郎『堀田善衛とドストエフスキー』(群像社, 2021)は、本作をシリアスかつ一種の実存主義的な作品と読もうとしたかに思える。たしかに、広島での最終場面(第四部六「俱会一処」)は緊迫していて、そのように読めるかもしれないが。

しかし、漢数字の付された各パートは個々の登場人物によって調子が異なり、かなりスラップスティックな雰囲気のあるパートもある(出教授が出て来るパートとしては、第一部三、四や一〇、第二部八など)。水溜はバフチンのドストエフスキー論におけるポリフォニーを参照するが、そういった問題なのか？

堀田の作品には、『スフィンクス』(1965)や『19階日本横丁』(1972)のような部分的に通俗臭のするものがあるが、それと近いのか？、あるいは、『発光要請とモスラ』の一方的な反米観(後述)と類似？

3 出音也のモデル考と中野重治「プロクラステーション」

以上のように、『審判』の出音也は大学教授(おそらく勤務先は東京大学)で、専門の氷雪学のほか、ジャーナリズムでも反ソ親米的な論客として著名な学者という描写もある。戦前戦中における対ソ連寒冷地研究についても言及されていた。

家族構成やその他の経歴(教授になった年齢*, 昭和天皇香淳皇后への御進講年度*など)に違いがあるとはいえ、氷雪学の世界的な権威で、グリーンランドにおいて米軍の支援によって氷雪の調査研究を行った日本人学者は、中谷宇吉郎(1900-1962)以外に有り得ない。『審判』の設定年代が1959年で、出教授が59歳とされていることも、1900年生まれの中谷と一致する。中谷は1959年に、『審判』第二部通りT3(p. 168)の視察も行ってた；《⇒「中谷宇吉郎の略歴」；<https://www.metaco.co.jp/nakaya2001/history.html>》

* 1925年理化学研究所勤務, 英国留学の後1930年より北海道帝国大学助教授。翌年博士号を取得。1932年より没年まで教授。杉山滋郎『中谷宇吉郎一人の役に立つ研究をせよ』ミネルヴァ書房, 2015。

* 1946年12月, 東宮殿下への御進講が4日にあり, 翌週急な話で昭和天皇への御進講となった。中谷「雪今昔物語」(初出1947), 『中谷宇吉郎随筆集』第2巻, 朝日新聞社, 1966。

中谷宇吉郎に注目するのは、堀田『審判』が『世界』誌に1960年1月から1963年3月まで連載され、それが終わった翌々月より、堀田とも関わりの深い中野重治(1902-79)が、同じ中谷をモデルにしたと考えられる「プロクラステーション」および「三人」を『群像』1963年5-6月号に寄稿したからである(6月号の「三人」を併せて、1965年刊の単行本『眺め』<筑摩書房刊>で「プロクラステーション」と改題された)。

中野「プロクラステーション」で中谷をモデルにしたと考えられる野上篤が登場するのは、主に『群像』5月号に掲載された前半。春の彼岸に妻子が外出している時、主人公で語り手の安田が、地球に関する新聞記事から前に購入した地球儀に目をやり、カリブ海の問題(キューバ危機)で、核戦争になっても人類全部が死なない、という議論*があったことを想起する(全4, p.167; *『世界』1962年10月号での日本共産党 内野竹千代発言; ←実際には、キューバ危機<同年10-11月>前の発言だった)。

さらに安田は、地球儀でグリーンランドを見て、前年亡くなった旧友(高校の同級生*)野上を思い出す。野上の葬儀の回想の後、彼から昔グリーンランドについて聞いたこと、それが「アメリカの反ソ戦略体系に組みこまれている」(全4, p.174)と思い、それについて野上に聞いてみたかった; *中野重治と中谷宇吉郎とが第四高等学校で同級生であったことについて、発表者は2023年2月に金沢市での“中野重治を読む会”発表で、

第四高等学校の『北辰会雑誌』BNにより論証；↳ <https://researchmap.jp/read0040709/presentations/41329133>》

1935, 6年頃, 安田が有楽町で「雪国の春」という文化映画を見た時, 雪国が「絶望的に暗い」(p.176)という野上のコメントに共感したこと。しかし, 敗戦の数年後に野上が高級な雑誌に地球について書いた記事を見て, 安田は「その文章を「反動的」だと思った」(p.178)。

その後, 旧友の鹿沢信吉から長い手紙が届いて, そこで4, 5年前に近藤に意見しておけば良かったことをプロクラスティネーションと書いていた, という所で前半が了(鹿沢のモデルは窪川鶴次郎, 近藤のモデルは宮本顕治, 4, 5年前とは, 宮本が書記長になった1958年より前, の意味か)。

同作後半は, 敗戦国ドイツでの共産党の対応と徳田球一らの「人民に訴ふ」との比較, 1936, 7, 8年頃の“三人”(一人目のモデルは中本たか子か)とのプロクラスティネーションにまつわる回想があり, 最後に野上が想起される。これは戦後と思われるが, 彼がグリーンランドについて説明してくれた時に, 「**案外, 君あ, 謙遜なんだなあ...**」もしくは「**案外, 君あ, 傲慢でないんだなあ...**」と言われたことを思い出し, その時どうしてなのか尋ねなかったことをプロクラスティネーションとしている。それにより, 「**安田が救われていた**」, とする(pp.197f.)。

4 考察；モデルとキャラクターとの落差

ともあれ, 両作の登場人物モデルと考えられる中谷宇吉郎は, 中野重治や堀田善衛に比べても負けない量の文章を公にしている。最初の随筆集『冬の華』(岩波書店, 1938)に始まる, 一般向け科学随筆集が十数冊あり, コンピレーションだけでも下記の4冊がある(多くがNDLデジタルで利用可)。

『中谷宇吉郎随筆集』1, 2, 3(朝日新聞社, 1966), 『中谷宇吉郎随筆集』(岩波文庫, 1988; ←現代仮名遣いに改変)。

以下に, 堀田『審判』と関わりのある原水爆関係, ソ連関係について代表的な2点を引用する。以下, 下線は引用者。

「原子爆弾雑話」(初出1945. 10)； 勿論我国でも此の時代(引用者注; 1937年頃)に既に理研の仁科博士の下や, 阪大の菊池教授の所で, 原子物理学関係の実験が開始されてゐたので, さういふ方面からも進言があつたことであらう。しかし何十年か先のことで, しかも果して兵器として実用化されるかどうかともまるで見当のつかない話を, 本気で取り上げてくれる人は無かつた。やれば出来るに決つてゐることをやるのを研究と称することになつてゐた我国の習慣では, それも致し方ないことであつた。

ところが, 当時海軍の某研究所長であつた或る将官が, 真面目にこの問題に興味を持たれて, 一つ自分の研究所でそれに着手してみたいがという相談があつた。理研や阪大の方に立派なその方面の専門家が沢山居られるのに, 何も私などが出る必要はないのであるが, 話をした責任上とにかく相談にはあづかることになつた。

今から考えてみれば, あの時それだけの研究費を, 既に原子物理学方面の実験を開始している専門家たちの方へ廻してもらつた方が, 進歩が速かつたことであらう。しかし何万円という研究費を毎年出すとなると, やはりその研究所の中で仕事をしなければならぬといふのが, 当時の実情であつた。何万円といふのは, その研究所としても可成り多額と考えられてゐた時代のことである。(中略)

少し笑話になるが, 我が国でも今度の大戦中, 或る方面で原子核崩壊の研究委員会が出来てゐた。その委員である一人の優秀な物理学者が, 関係官庁の要路の人のところまでわざわざ「出かけて来て, その研究に必要な資材の入手方の斡旋を乞はれた。その時の要求が真鍮棒一本であつたといふ話である。冗談と思われる人もあるかもしれないが, 私は自分の体験から考えて, 多分それは本当の話であらうと思つてゐる。

いくら日本が資材に乏しいといつても, かういふ重要な問題の研究に, 真鍮棒一本渡せない筈はな

い。ないものは真鍮棒ではなくて、一般の科学に対する理解なのである。そしてそれほどまでに科学者以外の人々が科学に無理解であるということは、煎じつめたところ国力の不足に起因するのであらう； in『春艸雑記』（生活社，1947）

「文化の責任者」（初出1959.1）； これに関して、原水爆禁止の問題を考えてみよう。日本の言論界は、ほとんど例外なく、ソ連が原水爆の禁止を提唱しているのに、米英は「滑ったの転んだの」といって、それに応じない、というふうな取り扱い方をしている。日本の言論にあらわれたところを見ると、誰でもソ連は「平和の国」で人道的であるが、米英は「戦争挑発者」で非人道的であるという印象をうける。（中略）

それで兵力の点では、米国はソ連とは、到底太刀打ちができない。原水爆を使わないで、一般兵器だけで戦争したら、アメリカが負ける公算の方が大きい。それで原水爆を禁止すると同時に、一般軍縮を並行に為すべきだというのである。（中略）

しかし此処に一つの提案がある。一般軍縮には、長い時間がかかるから、とりあえず原水爆の禁止だけをまずやって、それからゆっくり時間をかけて、一般軍縮の協定をやった方がよいという意見である。これに対する米英側の反対は、（中略）とくにアメリカで強いのであるが、ソ連への不信感である。

この不信感というのが、致命的な問題であって、ソ連は国際条約を守らない国であるという不信感なのである。果たしてそれが真実であるか否かは、次の問題として、米国の新聞などで、盛んにそういう宣伝がされ、ほとんどの国民が、そう思い込んでいることは、事実である。先年アメリカの新聞に出ていた記事では、ソ連は過去において、各国と数百の国際条約を結んでいるが、その条約の大多数を、自分の都合で、勝手に破棄している、と書き立てていた。（中略）

その一例として、先般のハンガリー問題、とくにナジ前首相の処刑の問題について、考察をしてみよう。（中略）このときナジ首相及びその協力者たちは、ソ連のタンクに追われて、遂に抵抗を放棄、ユーゴの大使館だったか、とにかく外国公館へ逃げ込んだ。（中略）

大使館や公使館、或いは軍艦などに、外国の国事犯が逃げ込んだ場合は、犯人引き渡しの要求があっても、渡さないで保護するというのが、世界各国間のとり決めになっている。（中略）ナジ首相の場合も、流石にソ連も大使館の襲撃はしなかった。そのかわりナジ首相及び協力者たちの生命は保証するという条件で、その引き渡しを要求してきた。その保証は文書によったもので、それならばというので、ナジ首相たちを館外へ送り出した。しかしそのまま一行は行方不明になってしまった。そしてこの六月になって、突如、ソ連側から、ナジ前首相は処刑ずみという発表があった； in『文化の責任者』（文藝春秋新社，1959）

後者はこの後、ソ連びいきの“文化人”の「責任をもたない言論」を攻撃する議論に移行する。上に引用した部分も、原水爆禁止を巡る各国の駆け引きからハンガリー動乱に話題が変わるなど、立論はややトリッキーかもしれない。とはいえ、ナジ首相^(ママ)の処刑に関しては、現時点でのプリゴジン氏やナワリヌイ氏の処遇を考えれば、当時としては真つ当すぎる議論ではないだろうか。

対して、マルクス主義者であった中野重治は、おそらくハンガリー動乱に関しての評論を書いていないのではないか（1956年頃の評論を集めた、中野の全集13および14には、少なくとも入っていない）。彼は上記の中谷論と同じ1959年にソヴィエト作家同盟に招かれて訪ソしているので、1956年のソ連の軍事行動に批判的であったとは思えない（堀田も1958年に、アジア・アフリカ作家会議の準備で訪ソしていた；↳ “備忘録”参照）。

マルクス主義者ではなかった堀田善衛は、「砂川からブダペストまで」を書いていた（初出1956.12，堀田全集14）。沈思黙考の成果ではなく感情に訴えかけるような文章であるように思えるが、“権力に対する民衆の抵抗”（p. 103）が砂川にもブダペストにも見られる、というのが一貫した主張ではないか。とくに末尾近くでソ連の公式声明を引用し、そこで“反動と反革命勢力”と合同した“勤労者の正しい進歩的な

運動” (p. 110), という文言を見つけて、彼らが外国軍隊の撤退を求めて立ち上がったのだと砂川問題に繋げる。しかし、ソ連政府のお墨付きがなぜ必要だったのか？ 『発光妖精とモスラ』 (1961)にも見られた反米観からか？

↳ 中谷の評論がやや時間が経ってのものであったとしても、ハンガリー動乱に対する見識は明らかに、中谷宇吉郎>堀田善衛、であろう。

もつとも、中谷の原水爆およびソ連に関わる過去の言説に、瑕疵が無かった訳ではない。おそらく最も悪名高い、毎日新聞1954年4月8日記事「ちえのない人々」は、同年にビキニ環礁で第五福竜丸が被曝した放射能を日本の科学者が調査研究し、メディアがそれを報道したことが「ちえのない」ことであり、加えてソ連が苦勞せずに欲しい原水爆の情報を得たことを苦々しく思う、という主張が主眼であった。

ところが、何故か父娘の会話体という書き方で、「船の持ち主へ、すぐ一千万ドルくらい、いくらになるかな、三十六億円か、ジープか何かに札束を積み上げて行って行くんだよ、三十六億円ならたいい売るだろうよ」、「もちろん、その方へも、思い切って金を出すんだね。重体の人は別として、入院しなくてすむという程度の人なら、一人に一万ドルも出したら、たいい文句は言わないだろう」、云々といった軽口風の語りをしてしまった。その後、久保山愛吉氏が逝去されたので、この軽口が結果的に“鬼畜の言葉”などと批難されることになった(この表現は、石母田正だが...)

↳ この後、攻撃して良い対象としての中谷宇吉郎、といった風潮が生まれたのかどうか、堀田『審判』で出教授の反ソという性格付けが押し出される時に、家族に関わる彼の(あるいは彼に対する)滑稽な言動が、一種茶化されたように描写されることがある。

第一部の三で出教授の家族が教授視点で紹介される中で、長男信夫の国際関係専攻に嫌悪するという描写で、「ソ連に電子計算機なんかあるもんか」、と信夫に断言した一月後に、ソ連が人工衛星を打ち上げたエピソードが挿入されている(p.27)。同じ第一部の一〇で、横浜港へポール・リポートを迎えに行く車のなかで吉備彦に、「じゃ、先生はなんのためにグリーンランドくんだりまで行って氷雪の調査なんかしてるのさ。アメリカの対ソ作戦用にか」(p.107),と言わせている。

出教授については反ソや家族関係だけでなく、御進講に関わる上昇志向や、第四部二での河北画伯に対する対応のように権威に弱い俗物のような描写からも、実際の中谷より愚鈍なキャラクターにされていると考えられる。これは、存命のモデルに対するリスペクトが欠如していたのではないか(なお、同作で雪見子のパトロン的な人物として登場する、外務大臣花樹の描かれ方も同上では)。

↑ 発表者の憶測だが、中野重治が堀田『審判』の連載が終わってすぐに、同じ中谷宇吉郎をモデルとしたとしか考えられないキャラクターの登場する「プロクラスティネーション」を書いたのは、このような『審判』での出教授の描写への違和感があったのでは。中野もその野上というキャラクターについて、反ソ、反動的などと書きながらも、作全体としては旧友への追悼の念が溢れていたように思われる(前半の青山葬儀場での葬儀風景など)。

本発表の主テーマであった、作者である堀田の原水爆観に話を戻す。堀田が中谷の「原子爆弾雑話」を読んでいたかどうかは分からないし(初出は『文藝春秋』)、中谷言説の解釈にもよるが、彼は戦時下に原爆の開発に間接的であれ関与していたのではないかと思われる。

この「原子爆弾雑話」だけでなく、「文化の責任者」にしても毎日新聞の記事にしても、中谷は原水爆の開発に否定的ではなく、むしろ軍事研究に科学者(物理学者)がコミットすることに前のめりだったのではないだろうか。とくに「原子爆弾雑話」では、戦時下の国力が充実しており帝国が科学に対して理解が深かったなら、本邦で原爆の開発が可能であったのでは、と含意されているようにも読める。

対して『審判』では、出教授が戦時下で大日本帝国の軍事研究に関わったような表現はあるものの(戦時下での着氷の研究などは、史実通りらしいが;杉山滋郎前掲書による)、彼が原水爆を容認したりその開発を肯定視するような記載は全く無い。

↳ 原爆投下に関わったことがトラウマとなっているポール・リポートに対し、出音也を原子力に関わる科学技術を肯定視するキャラクターとして、対峙する位置に置くこともできた(モデルが分かっている読者がそのように読むかもしれないが)。しかし堀田は、そのことを出音也教授の造形に生かさなかった、あるいは生かし切れなかった。

↑ 作中でオープンハイマーへの言及があるので(第二部の一四「キリストは一人か」、p.266)、堀田が原水爆の開発に積極的にコミットする物理学者を想定できなかった訳ではないだろうが...

↳ 堀田は、原水爆の倫理性を問うことを棚上げにしたかったのか?(あるいは、堀田にとって自明すぎて、問うに値しなかったのか?) 少なくとも、次のような広島での恭助の独白的な台詞(第四部の六「俱会一処」、p. 506)は、原水爆そのものを問うことを放棄しているのでは。

...キリスト教はイエスの殺戮によって確立し、現代史は広島やアウシュヴィッツによって、逆戻りも横滑りもならぬように釘をうたれ歯止めをかけられている。(中略)

「その虚無、それが裁きなのだ。(中略)

「もし原子爆弾や水素爆弾が悪であり否定し廃止すべきものであるとしたら、それはこの武器が、一切を虚無化して行くからなのだ。(後略)

{中谷宇吉郎を中心とした備忘録; 下線は中野・堀田相互の書簡あり}

1945 中谷「原子爆弾雑話」(10月)、中野、日本共産党に再入党(11月)、新日本文学会創立に伴い、中野が中央委員に選出(12月)

1946 中谷、昭和天皇香淳皇后への御進講(12月; ←吉田茂、武見太郎らが尽力した模様)

1947 堀田、中国より帰国(1月)、中野、参議院議員に(4月-)

1950 マッカーシズム(3月-、この語の始まりとされる)、朝鮮戦争(6月-)

1952 堀田、「広場の孤独」などで1951年度下半期の芥川賞受賞(1月)、中谷、6月より2年間米に滞在

1953 ローゼンバーグ事件(6月処刑)、堀田の中野宛て書簡で新日本文学会の対応を問い合わせ

1954 第五福竜丸事件(3月)、中谷「ちえのない人々」(4月; 米滞在中)、中野『むらぎも』(8月)、久保山愛吉氏逝去(9月)

1955 砂川闘争の始まり(5月-)、日本共産党第6回全国協議会(六全協、7月)、堀田『記念碑』(11月)

1956 スターリン批判(2月)、ハンガリー動乱(10月-)、堀田、第一回アジア作家会議出席のためインドへ(11月-)、堀田「砂川からブダペストまで」(12月)

1957 中谷、夏季にグリーンランド調査、以降1960まで毎年夏季に調査、中野・堀田ら訪中(10月)

1958 ハンガリーのナジ第5代閣僚評議会議長処刑される(6月)、堀田、ソ連などを訪問(6月)、中野、日本共産党中央委員に(7月-)

1959 中谷「文化の責任者」(1月、ソ連によるナジ処刑を問題視)、中野、訪ソ、中野『梨の花』(5月)

1960 堀田、『審判』の連載開始(1月-)、新安保条約成立(6月)、岸内閣総辞職(7月)

1961 堀田、中村真一郎、福永武彦と共作『発光妖精とモスラ』(1月)、堀田『海鳴りの底から』(11月)

1962 中谷逝去(4月、中野は葬儀に出席)、日本共産党内野竹千代発言(10月)、キューバ危機(10-11月)

1963 中野「プロクラスティネーション」(5月-)、堀田『審判』(10月); ←中谷をモデルとした二作